

総務産業常任委員会会議録

- 1 日 時 令和5年8月8日(火)
9時58分開会 16時00分閉会
- 2 会議場所 役場3階 第1委員会室・鹿追町
- 3 出席議員 委員長：中河つる子 副委員長：田村幸紀
委 員：只野敏彦、鈴木孝寿、中島里司(欠席)、深沼達生
議 長：山下清美
- 4 事務局 事務局長：大尾 智、次長兼総務係長：川口二郎
- 5 説明員 企画課長：鈴木 聡、企画課長補佐：吉田寛臣、
地域おこし協力隊：木村悦子、中田幹悟、鹿追町企画課長：草野礼行
- 6 議 件
(1) 所管事務調査について
・地域おこし協力隊の現状について
(2) その他
- 7 会議録 別紙のとおり

【開会 9 : 5 8】

(1) 所管事務調査について

- ・地域おこし協力隊の現状について

委員長（中河つる子）： 只今より、総務産業常任委員会を始める。地域おこし協力隊の現状について、企画課より説明をお願いします。

企画課長（鈴木 聡）：説明員の紹介

企画課長補佐（吉田寛臣）：資料に基づき説明

委員長：説明を聞いて質問があれば。

只野委員：定着率が非常に低いと思う、そこに対しての原因というか、企画課でわかっている範囲でいいので教えてほしい。

企画課長：色々な要因があったのだと思っている。その中で3年間の任期でまちづくりに携わっていただいて、その後、まちづくりに関する起業だとか、その後の繋がりというものをなかなか見いだせなかったというところもあるし、あと、3年間経験されて、その後ご本人がやりたいことが別に見つかったというところも、それぞれ複合的な要因があって今の現状になっていると考えている。その辺、3年後に向けたマッチングだとかフォローというものをできる限り町としても心掛けてはいるが、なかなかマッチングされていないということがあると思っている。

只野委員：原因がわかって、マッチングがうまくいっていない、じゃあそれをどうするかというところが今後の課題だと思うが、今後の課題に対してどのように取り組んでいくのか教えてほしい。

企画課長：3年間という任用の期間において、どれだけご本人の将来に向かって支援しているかということが重要だと思うので、確かに協力隊としてそれぞれ、観光だとかまちの宣伝という形の役割を担っているところではあるけれども、その中で本人が次につながるものがあるのであれば、任用期間であってもそこにつながる活動に対しては支援というか、自由性を持った中で活動してもらおうということを今取り組んでいるところである。3年間、町の仕事しかできないということではその後につながっていかないと思うので、3年間の間であろうと、その後につながる活動に対する支援をしていきたいと思い、今、それぞれの隊員の意向を聞きながらやっているという状況である。

只野委員：そもそも最初の段階で、地域おこし協力隊を多く採用していて定着率も高いとこ

ろがあると思う。そういう先進地を把握されているのか、知っていれば教えていただきたい。

企画課長：管内でいけば明日視察行かれる新得町だとか、上士幌町も積極的に受け入れて、その後地元での起業だとか定着率が高い町村だと認識している。また、大樹町は宇宙を基盤に進めているので、その関連企業だとかの定着があると認識している。

委員長：地域おこし協力隊から活動状況などを伺いたい。

地域おこし協力隊（木村悦子・中田幹悟）：活動状況説明

委員長：隊員の方の状況も聞いたところで何か質問あれば。

只野委員：木村さんには観光協会会長の時には色々お世話になったし、中田さんにも軽トラ市では非常にお世話になってお話しをさせてもらったけれども、改めてお聞きしたいが、北海道へのあこがれというものもあったと思うが、色々な市町村の地域おこし協力隊の中からなぜ清水を選んだのか、どういう理由で清水に来ようと思ったのかを教えてください。

木村隊員：東京に居る頃から地域おこし協力隊に興味はあって、その中でも北海道のどこかの地域というような感じで2、3年くらい見ていた。私の希望として、移住と観光の仕事をやってみたいという気持ちがあったので、色々きっかけがあって清水町を知ることになるが、そこで清水町のホームページを調べてみたら協力隊の職種の中に移住と観光、商工観光課の募集があったので応募したという経緯があった。清水町を選んだというのは、利便性を考慮してというのが一番大きいところ。ペーパードライバーだったので、JRの駅がある清水町、空港などにもアクセスもしやすいし、何かあった時にすぐに東京に駆け付けられるという利便性を考慮して清水町を選んだ。

中田隊員：札幌の農業法人で働いていた時期があって、北海道自体に興味があり、北海道に住みたいとなった時に、その時映像の勉強とかもして、インターネットで情報を探していたところ、農業の町ということで農業の事も映像にできたらいいなと魅力的に感じて応募した。

田村委員：応募する時は3年間というものがあったって、応募する時に抱いていた理想が、現状と比べて、応募する時に3年間終わって4年目に自分がどういうふうになっていたと、たぶん思い描いて応募されたと思うが、応募した時点と今のギャップがあるかどうか。

中田隊員：私は3年後をどう考えていたかという、映像を作るのがうまくなればいいなと考えていて、そのうえで3年後どうするか決めて行こうと思っていた。

木村隊員：私は協力隊になるからというような、こうしたいああしたいというガチガチに決めたわけではなくて、3年清水町に居る間に何か見つけられたらというような、フ

ラットな気持ちできているので、ギャップというのは感じていない。任期はあと1年あるので、この1年をどういうふうに過ごそうかという方が今は気持ち的には大きい。

只野委員：プロフィールを見ると、中田さんは長野県育ちだが、長野県伊那市が地域おこし協力隊の定着率が100%で出ている。そこは副業が認められている。週2日、3日協力隊の仕事で、他は副業をやってもいいということがあって、それで首都圏からいくのだと思う。人口も減っていくので、定着も目指さなければならないというところもあって、そのやり方が非常にいいと思う。一般質問でもアンテナショップというのは商業系の立場から言っているけれども、アンテナショップを作ることによって、田舎でのんびり商売したいという地域おこし協力隊の人が現れても面白いなど思っている。そういった情報をホームページを見ると言うのが一番、応募する時に確認する作業だと思う。そういうことをもしやったら、やってみたいという方が多くなると思うか。

木村隊員：私がここに来て感じたのは、協力隊が定着していないという現状も知っていたし、それはなぜかと考えたときに、協力隊へのサポートみたいな部分が弱いのかなと感じた。なので、むやみやたらに他の市町村の真似をしても、体制が整っていないとその事例はうまくいかないのではないかなと思う。副業もOKというのはすごく魅力的だと思う。協力隊の研修とかでも起業した人のお話を聞くと、自分の意志を持った人が多くいて、役場への交渉とかも自分でやっている方もいるみたいで、そういう話を聞くと、意志の強い人がこの町にも来てリーダーシップをとっていけば、ちょっとずつ変わって定着率も増えるのではないかなと感じている。

中田隊員：正直、ここに定住したいと思って来ているわけではないというか、明確な意思を持ってきているわけではないので、もう少し、最初からここに来てお店とかを開きたいという意思を持った人が協力隊になって、その準備期間として協力隊の期間を使っていくということであれば、定着率が増えていくのではないかなと思う。

鈴木委員：清水に入ってきたのが平成22年から26名で間違いないか。

企画課長：間違いない。

鈴木委員：この26名の分析をすると、途中でやめたというか1年くらいでやめている人がいたりするが、今年は募集を全部で何人して4人なのか。

企画課長：今4名の方が協力員としていて、その他に募集中というのが畜産協力員1名、郷土史料館の学習支援員1名の2名を募集中である。3月以降、募集期間を設けてやってきてはいはいるけれども、なかなか応募がないというのが現状。一つの要因として、特別交付税措置の件費の措置額があるので、それを意識しながら給料設定をしているというところも実際ある。ただ、その給与額が本当に魅力的なものかというところではないという事も認識している。この中でいくと文化芸術事業協力員については少し高く設定しているし、郷土学習支援員についても司書という資格を持ってる方であれば配慮しなければならないという思いで募集活動はしているところ

ろである。その中で応募がある町村と無い町村で二極化してきていると思う。募集の中でギチギチに条件を固めてしまうと余計来づらくなるのというのもあるので、やわらかくしたなかでの募集というのも必要と思うので、定住というのをメインに出すと来づらくなるというのもあるので、その辺はバランスを取りながら募集活動をしていく必要があると思う。

鈴木委員：何年か前にも一部指摘させてもらったけれども、千年の森のもぎりやったり、会計やったり、これが地域おこし協力隊の仕事かなというところも過去にもあって、定住しない理由はまずそこだと思う。あと、畜産支援員は若干ヘルパー的な役割を担っている、人が足りないところに何とか入れたいという、こちらの事情でやられているパターンが要は人が来ないのかなと、今は大分変わってきたというのは認識しているが、地域おこし協力隊からあまり良くない評判も聞いたことがあったので、それを払しょくしていくには時間がかかるのかなというのと、フォローアップできる体制が町としてというか、町民ができていないと思うので、それらも含めてまずは、今いる方としっかり話して、単に他の町の真似をしたって全然違うので深く話をしたいと思う。業種をもう少し考えていくべきではないかと思う。夢を持った仕事につながるような募集の仕方というのを今後考えていかなければならないと思うが。

企画課長：来ていただく方の思いとこちら側の思いをうまく合わせなければならないというのは一番難しいと考えている。確かに平成22年に始めた頃は、どちらかという町側も人手という感覚が強かったのかなという思いは持っている。そういう状況だと来てもギャップがあって、理想とは違うとなって別な仕事を見つけていくということが続いて来たのかなという思いは持っている。単純な働き手というか人手として捉えてしまうと次につながっていかないと思っているので、目的とお願いしたいことも計画して募集していかなければならないと思う。3年間の中で自由に考えてもらえる体制も整えていかなければならないと思っている。バランスを取りながら町全体で受け入れるというような雰囲気作りができればいいと思っている。

鈴木委員：今いる方は3年経ったときに役場としてどういうフォローアップするかが大事だと思う。結局アフターフォローをきちんとやっている町ってないので、アフターフォローを独自で考える必要があると、入り口の前にしっかりとしたシステムを作り上げないとなかなか今の時代来ない。今のところフォローアップするシステムがあるのかなのか。

企画課長：現時点でフォローアップということでいけば、地域おこしに限ったものではないけれども、起業支援というメニューを商工観光課で持っているので、それは使えると思っている。また、希望によっては役場の会計年度任用職員という制度もあるので、その辺は柔軟にやっていきたいという思いはあるけれども、きちんとしたフォローアップの体制というのは、明確になっているかというところではないというのが現状だと思っている。ただ、現状を踏まえて、今も年に1回から2回程度、協力隊の方と話をする機会を持って、それぞれの希望することや今後に向けた相談をさせていただいているので、その内容を踏まえてアフターフォローというのはきちんとしていきたいと思っている。

鈴木委員：来ている人を大事にする町となると評価が違うと思う。

企画課長：総括としての企画課としては、今は年2回、全員集まっていたいただいて現状と活動していく中での要望とかを聞いているところ。

鈴木委員：2、3年前に観光施設を見て、例えば千年の森に行った時に今募集しているけれどいないと、あそこはガーデニングの有名な方がいるので、ガーデニングの弟子になれるというようなシステムを作った方が面白いという話をして、要は民間の会社に入って手伝いながら地域おこし協力隊を運営しているというパターンがあると聞いているので、そういうところをもっともっと活かせればと思うが、その後どういう動きになったのか。

企画課長補佐：ガーデニングの採用に関しては、千年の森に確認したが、担当者がそんなに甘いものじゃないというのが実際であった。

企画課長：やはりシステム作りが重要になってくると思う。単純にその職場に入って、お手伝いするというだけでは働き手でしかないので、そこでどういうふうにスキルを付けていただいて将来独立するとか、別の分野を開拓するとかにつなげていかなければならないと思っているので、その辺のシステムをどう作っていくかということが必要になってくると思うので、その点については行政だけではなく、民間の方々とも協議しながら進めていく必要があると思っているが、なかなかきっかけづくりというか、形にできていないというのが現状であるから、手探り状態というような状況だと思う。

鈴木委員：全体としてやらないと、行政だけでやったら無理だから、清水の特性から言ったら農業になるのは事実だし、農産加工についてどう考えていくかというのはその先だし、難しいけれども今できるのはどうやって仲間にしていくかというのが我々の命題なのかなと、そうすることによってうまく循環していくのかなと思う。

企画課長：せっかく清水に来られた方々なので、できる限り定着していただいて清水に貢献していただくということは目指していきたいと思う。それぞれの思いについては丁寧にお聞きした中でフォローを可能な限りしていきたいと思っているので、また、行政だけでは叶わないこともあるので、各機関にも色んな場面を通じてお話しを伺いながら進めていきたいと思い取り組んでいきたい。

只野委員：清水には清水のやり方があると話していたけれども、やはり、いいところを学ぶべきだと思う。まずは視察に行ったりして見る、でも結局はやらないとダメだけど先に勉強しなければならないというところがある。我々は質問したり提案することで、やるのは皆さんだと思う。どれだけ視察に行っているのか、まずいいところを見に行かないと、自分の能力なんてたかだか知れてるので、そこから始めていただいていいところを実行していただきたいと思う。

企画課長：なかなか他の町村との横のつながりが無かったのは実情である。道もネットワー

クづくりを進めている、地域おこし協力隊同士の情報交換もあるし、その中で出てくる意見を自治体側も共有する取り組みが北海道を中心に始まっているので、それに参加しながら進めていきたいと思う。

鈴木委員：いいところは目立っているけれども、清水は管内でも平均的なところだと思っているので、難しいのは地域性、酪農の町というのは逆に難しい、ただ、決してやっていないとは思っていない。すぐやれることというアフターフォローをどうしていくかというのは研究しなくてもできることだと思うので、そこが一番だと思う。

委員長：暫時休憩する。

【休憩 10：59】

【再開 11：08】

委員長：休憩前に引き続き会議を開く。質問があれば。

山下議長：地域おこし協力隊の皆さんは志を持って来ている方が多い、清水町でこれを導入したきっかけというのが、財政大変な時に職員を採用しないでいた部分で、補充的な意味が結構あったような気がする。徐々に傾向は変わってきている。地域おこし協力隊のやりたい事への時間を確保してあげたり、やりがいを見つけていただけるような環境になったらいいと考えていた。

企画課長：過去には人手対策でというのは否めないと個人的には思っている。自由な視点でまちづくりに参加していただくということは大切だと思うので、今後地域おこし協力隊として来ていただける方を大切に支援しながら、違った目線から清水を見てもらうということも必要だと思うので、そういうことも考えながら地域おこし協力隊という制度を最大限活用していければと思っている。

只野委員：この間NHKで見たけれども、中頓別の中野さんの話、彼は19歳で地域おこし協力隊になって、70年続いたお菓子屋さんが廃業になるので、そこに手を挙げて1カ月の修行時間しかなくやったのだけれども、売れるようなものではなかったけれども町の人が買い支えていた。その方が地域の方にお世話になったのでレモネードを作って地域に貢献してというような、そういう人によって町は変わっていくというところもあるので、そういう事例も研究してアンテナ高くしていただいてチャレンジして行ってほしいと思う。

企画課長：受け皿をどこに作っていくかというのは重要なことなので、行政でできる範囲と商工会などに協力願う範囲、色々あると思うけれども、アンテナを張った中でタイミングを逃すことなくできたらいいと思う。

委員長：暫時休憩する。

【休憩 11：19】

【再開 11：26】

委員長：休憩前に引き継ぎ会議を開く。貴重な時間の中参加していただきありがとう。

【鹿追町視察 13：22】

鹿追町企画課長（草野礼行）：資料に基づき説明。

只野委員：地域おこし協力隊は公募だと思っていたけれども、公募じゃない方が多くて、話し合いでやっている。

草野課長：もちろん公募の場合もあるけれども、例えばこども園のスタッフだとかは公募にしているけれども、なかなか集まらない。こういう条件でやってくれますかという話をした上でやっていただいている。うちの場合はある程度人が決まってるパターンが多いかもしれない。あと、うちは産業研修制度というのをやっているけれども、1年間、農家に研修に行く制度、その1年間終わった後にまだ働きたいという方は、地域おこし協力隊制度を使っている方も何名かいる。基本的に町外からこられている方が多いので、地域おこし協力隊の制度があるがこれでどうかと話をした上で、そのまま残っていただいているケースが多い。なかなか公募は来ない。

只野委員：どこかにつてがあって、この事業に来て欲しいとかいう形なのか。

草野課長：だいたい現課が見つけてくる。企画課が募集のことをやるけれども、だいたい現場の方で人を見つけてくる。その方がその後がうまくいく。一般公募も面接などをやるけれども、なかなかいい人材がなくて、どちらかというと研修生だった方が、ある程度鹿追町を知っているし、そういう方だとこちら側も安心できるので、お互いに理解し合っている中で、長く続いているのではないかと思う。

只野委員：ネットで見ただけだが、カフェの店員募集だとか、地域おこし協力隊を募集するにあたって、定住という部分もうたっていたと思うけれども、普通でいくと定住をうたうとなかなか来づらいとかいう声もあるけれども、そういう点はどういう感じなのか。

草野課長：カフェのスタッフの今の方は公募であった。もともと奥様が十勝の方で、すんなり来ていただけた。

只野委員：定住とうたった方がメリットはあると思うし、来る方も抵抗なく来るということなのか。

草野課長：人によるかもしれない。カフェの方は札幌の方だけれども、道東方面にあこがれがあったりしたのと、カフェもやってみたいということで、ちょうど意志があったというような形である。マンゴー栽培の方は、沖縄に住んでいた方だけれども、本当にマンゴーが好きで、ピッタリ合った方。ご主人と二人で来られているが、なかなかピッタリ合う方って難しいけれども、マンゴーも募集で来ている。定住に関し

てはあまり違和感がないのではないかと思います。

只野委員：定住率は割と高い、半分くらいは定住している。

草野課長：女性の方も多くて、隊員になった時には独身だったけれども、ご縁があってという方も何名かいる。

只野委員：どういうフォローがあって定住しやすくなったとか、定住した後もこういうフォローをしているというものがあれば教えて欲しい。

草野課長：もちろん現課ではやっているが、企画課サイドではあまりやっていないと思う。町によっては地域おこし協力隊だけのコミュニティを作ったりしているところもあるけれども、うちはあえてしていない。年齢層にバラつきもあるし、それぞれの思いも違うので、そういうコミュニティは作っていない。現課に任せて現課がフォローする形にしている。十勝管内の研修や北海道の研修には行ってもらっている。

田村委員：退職隊員の定着で、退職後に役場に入られている方が多いのは、地域おこし協力隊が終わった後は役場という空気感があるのか、それとも役場の方で多少のサポートをしながら起業したりがないなら会計年度任用職員にというような働きかけなどはあるのか。

草野課長：何名かいる方には、もう少し働きたいという方が多い、もう少し同じ仕事がしたいという方が多いので、こちら側から声をかけて、会計年度任用職員で引き続きどうかという話はさせていただいている。派遣型だとそうではないので、行った先で従業員になったりとか、個人の方が新たに起業するというパターンになると思う。

田村委員：地域おこし協力隊の活動計画の中に町内で起業と書いてあるのが、これは起業しなければならないのか。

草野課長：町内で起業、もしくはそのまま働くという、派遣後雇用のどちらかが見込めるということを前提で審査会を行う。

鈴木委員：例えば、教育委員会の指導幹とかをうまく活用していると思う。高校のコーディネートにしても、本来であれば教育委員会なりで採用するものを、財政措置の裏付けをするのにうまく地域おこし協力隊を使っているというような考え方でいいか。

草野課長：気を付けなければならないのは、単なる労働力にならないようにしている。うまく国の財政支援があたる範囲でやっているというのが実情。

鈴木委員：帯広の方であれば一旦鹿追に住んでいただいて、終わった後は帰るパターンもあると。

草野課長：電気主任技術者の方は3年間住んでいただいたが、本人が家を持っていてどうしても通いたいということで、通っていただいている。

鈴木委員：公募によらないのが平成28年以降出ているが、清水町では公募をかけてもなかなか来てくれないというのが実情だと思う。それだけ魅力的な何かが無い限りは。それであれば、しっかりと機能するための地域おこし協力隊の運営をされているというのは考えさせていただいたが、マッチングがうまくいったというように思うが、カフェの方は公募だったのか。

草野課長：カフェの方は公募である。それまでの3年間も地域おこし協力隊で、令和元年から平成館がオープンして、令和1、2、3年と女性の地域おこし協力隊で、その方は地元で起業している。3年間終わって、もう一人公募しようということで、この方はなかなか見つからなかった。少し時間がかかった。いないことも想定して、今の会計年度任用職員で回そうということも話していたが、ギリギリ間に合った。

鈴木委員：公募で募集しているものは。

草野課長：子ども園のスタッフだがこない。うちの町には自衛隊があるので、自衛隊は転勤があり、その奥さんをお願いする方が早い。

鈴木委員：これまでの中で、すぐやめられた方もいたか。

草野課長：いた、派遣型で5月1日に来て6月30日にやめた方が一番短い。試用期間が4か月程あったけれども、責任を感じてしまったのか、うまくいかなかった。

鈴木委員：町中の会社や商店街で導入するとなると、労働環境も含めて難しいとは思いますが、そこまではなかなか。

草野課長：単に人が少ないのでそこに入るというのではだめなので、今やっている事の他に何か新しい部門を作りたいというのであれば、それは審査の対象になる。

鈴木委員：清水でいうと酪農に従事する方を募集して、一人いるけれども他にはなかなかこない、鹿追町は例えばヘルパー利用組合がこの制度で誰か呼んでくれないかというようなことは過去にもなかったのか。

草野課長：過去にもなかった。

鈴木委員：若い人に来てもらうというのが地域おこし協力隊のイメージであったが、システム的に、例えば退職されている元々力のある人を呼んできて、この制度にのって見たりだとかというのは理にかなっていると思う。町としてはできれば若い人たちに来て欲しいという意向もあると思うが、それについては今度どのように考えているのか。

草野課長：農業の研修生制度というのを24、25年やっている。その方も若いし女性。その方々は基本的に1年間しか研修をしないので、その方々にいかに残ってもらうかというのは常に連携しながらやっている。即戦力ももちろん大事であるが、若い方、

特に女性の方にもいて欲しいので、産業研修生との連携であったり、山村留学制度もやっていて、そこに親御さんが一緒に来られる方もいるので、そこでの連携をしたりとかというのは常に行っている。なかなか思うようにはいかないけれども、なるべく産業研修制度も、終わった後のフォローというのは色んなところでやったりするので、その辺は強化していきたいと思う。

委員長：募集する地域協力活動については、審査会で判断するというので、そこを通った方がこられるという話、民間事業者の負担を見ると、委嘱後1年以内に離職した場合には一切の経費を負担するなど、厳しいものがあると思うが、例えば民間の場合だと、実際に負担するのは大変な事、民間の方がフォローしたり、必要な人材として育てるとかということを経営にやらないと思うが、やめた人は一人しかいない。

草野課長：そもそもこの計画書を出してきているのがまだ2件しかない。他の企業からの提案書はまだない。途中で辞められてしまうと国の財政支援がない、町がリスクを背負うことになるので、それは民間の事業者さんにも協力していただいて、こういうリスクがあるけれども大丈夫かという話をさせていただいた上で、この事業を利用させていただいている。試用期間というのが設けられていて、ある程度、その会社でやっていけそうだとする上で持ってくる。審査会は4人で審査をするけれども、副町長、総務課長、企画課長と現場の所管の課長で審査をして、事業者にプレゼンをしていただいて説明を受けて、いいか悪いかだけの判断、単純に労働力ではないというのが条件で、その辺を見させてもらうが、そんなに難しくはないと思う。

只野委員：デジタル人材を入れたりとかをやっていること自体すごいけど、結局、結果が出ないと意味がないと思うけれども、その経緯というか経過状況はどんな感じか。

草野課長：国のデジタル田園都市の交付金が、去年から受付しているが、うちの町はまだ何個かしかやっていなくて、役場の中のデジタル化というのと、町内のデジタル化の2つあって、何をやっていこうかというところから理事者と話をし、現課からはなかなか出て来ないので、まず、現課に外部の人を入れて、今現場がどんなことをやっていてどんな課題があるかということで掘り起こしをしてみようという話をしたのがきっかけで、それであれば外の人がいいということになって、誰かいないかとなり、たまたまHDAという北海道庁のシステムをやっている会社で、うちの町に2年連続でワーケーションにきていただいていたご縁があって、話をしたところぜひやってみたいということになってうまくいった。来年度実行に向けてちょうど動いている最中である。

田村委員：電算会社が入っていると思うが、それはDXのシステムとぶつかることはないか。

草野課長：ぶつからないようにHDAが役場の各部署をまわって集約している。元々入っているものがあるのか悪いのかも分からないので、その辺も含めて提案してくれると思う。

只野委員：ふるさと納税についての人材を入れたという話、そっちの方のどんな感じか。

草野課長：今2年目だが、ふるさと納税はまだ手をつけていなくて、公園の利活用だとかの分野に力を入れてやっている。

(2) その他

【現地視察】

【終了 16:00】